



美術研修

2025年5月14日（水）
講師：美術研究家 沼辺 信一氏

神奈川県横須賀市と鎌倉市にある美術館を日帰りで訪れました。

横須賀・鎌倉の 美術館をたずねて



横須賀美術館をバックに



印象的な横須賀美術館の
エントランス



解説をする沼辺先生



山本丘人《地上風韻》
1975年
成川美術館蔵



鍋木清方《一葉女史の墓》1902年
鎌倉市鍋木清方記念美術館蔵
©Kiyoo Nemoto 2025/JAA2500067



鍋木清方のアトリエ



浅井忠《尼(巴里風俗)》1903年
石版、紙
神奈川県立近代美術館蔵(青木文庫)



中村不折(画)
《北斎鳥跡ヲ利用シテ立田川の図ヲ為ル》1908年
木版(新聞挿絵の清刷)、紙
神奈川県立近代美術館蔵(青木文庫)

お天気にも恵まれ、薫風の横須賀・鎌倉を満喫した一日でした。

横須賀美術館

自然の景観と調和するガラス箱のような美術館は、三方を山に囲まれ、正面からは海の眺望が楽しめます。開放的なエントランスホール、そして天井や壁にリズミカルに配置された丸穴から差し込む優しい陽の光は、美術品には決して影響がないよう計算されています。設計者の山本理顕氏は、建物のノーベル賞とも称されるブリツカー賞2024を受賞しました。

さて、当日は「箱根・芦ノ湖 成川美術館コレクション展」が開催されており、コレクションの中核を成す、近代日本画の革新者、山本丘人（1900―1986）の作品などを鑑賞しました。講師の沼辺先生より「日本画特有の輪郭線がなく、構図や力強いタッチは油絵の洋画と区別がつかない。新たなものへ挑戦していることがよくわかる。ここではもう、日本画とは画材が岩絵の具であることしか意味しません。」との解説があり、挑戦を続けた芸術家の気概を感じました。また、晩年の文学的、詩的な世界観の表現も大変印象的でした。

さらに「日本画は元来、襖絵や屏風、掛け軸など、建物の一部として存在していたが、生活様式の西洋化により額装して鑑賞するようになった。仕方がないとは言え、額のガラス越しではどうしても作品が遠い存在となってしまう。」との解説を聞き、この展覧会では一部の作品がガラスケースに収められずに、あえて剥き出しの形で展示されている意図を理解し、その迫力や美しさを堪能しました。

鎌倉市鍋木清方 記念美術館

鎌倉の小町通りを脇道に少し入るだけで別世界のような静けさを感じる、そんな美術館です。鍋木清方（1878―1972）は近代日本画の巨匠で江戸の浮世絵の画系をひく画家であり随筆家でもあります。当日は特別展「もの想う美人」にて浮世絵や上村松園、川瀬巴水、伊東深水などの作品も展示され、その時代を生きた女性の容姿の美しさのみならず、背景の物語や女性の内面をも表す深い表現に魅入られました。また、髪の毛の生え際が細かく描かれているところなど清方が喜多川歌麿の浮世絵を強く意識していることがよくわかる展覧会でした。

神奈川県立近代美術館 鎌倉別館

「木茂先生」こと、明治美術の研究者で愛書家の青木茂（1932―2021）の旧蔵書として当美術館に収蔵されている「青木文庫」を紹介するユニークな「挿絵」の展覧会が開催されました。挿絵は、江戸時代には絵師が手掛けていましたが明治になると洋画家の仕事へと移り、また印刷技術の変遷とともに作画の技法が変化していくことなどを沼辺先生に解説していただきました。日本で初めて出版された「アラビアンナイト（千一夜物語）」である『開巻驚奇 暴夜物語』（奎章閣、1875年刊）や、ミュンシャを意識したような文芸誌「明星」の表紙コレクションの展示もあり、明治時代の芸術家や芸術愛好家たちの海外への強いあこがれを感じました。